

丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度

永田幸志*・谷川 潔**・町田直樹**

I はじめに

ニホンカモシカ (*Capricornis crispus* 以下カモシカ) は、特別天然記念物に指定されており、神奈川県レッドデータ生物報告書(神奈川県生命の星・地球博物館 2006)により準絶滅危惧種に分類されている希少動物である。しかしながら、神奈川県における生息状況については、柴田(1964)による目撃記録の記載や、山口ら(1999)のアンケートによる分布調査の報告があるのみで、基礎的な情報がほとんどない状態であった。そこで、永田ら(2007)は、神奈川県自然環境保全センターが実施したニホンジカ (*Cervus nippon* 以下シカ) の生息密度調査の際に目撃されたカモシカの個体数から生息密度を算出し、シカに比べて低い生息密度で生息していることを確認した。

神奈川県のカモシカは、シカのように管理計画に基づくモニタリングが行われておらず、永田ら(2007)の報告以降、生息状況に関する報告がない。今回、継続実施されているシカの生息密度調査時に目撃されたカモシカの個体数から、2012年度～2015年度の生息密度を算出し、永田ら(2007)が報告した2004年度、2005年度の調査結果と比較を行った。

II 調査地域

調査は丹沢山地を含む、神奈川県相模原市(旧津久井町の範囲)、秦野市、厚木市、伊勢原市、南足柄市、足柄上郡松田町、足柄上郡山北町、愛甲郡愛川町、愛甲郡清川村であり、標高100 m程度の山麓域から標高1600mの高標高域まで広域を対象に実施した(図1)。

III 調査方法

神奈川県では、ニホンジカ管理計画に基づくモニタリングとして、区画法(Maruyama and Furubayashi 1983)による生息密度調査が2003年度以降毎年度実施されている(神奈川県 2015)。調査区は、概ね、ニホンジカ管理計画(神奈川県 2015)に示された管理ユニットごとに丹沢山地に51箇所設定されている。調査は、管理捕獲が行われている管理ユニット等、毎年30箇所程度で実施されており、3年程度で全ての調査区で調査が実施される(毎年調査される調査地もある)。

調査は、森林内の見通しがよくなり発見精度の高くなる11月下旬から1月下旬にかけて実施された。調査地域は急峻な場所も多く、調査時に危険を伴うため、あらかじめ踏査ルートを設定して行われた。調査時間は1時間30分とし(丹沢山調査区は2時間)、踏査ルート上で目撃したシカに加えて、カモシカについても発見時刻と頭数が地図上に記録された。

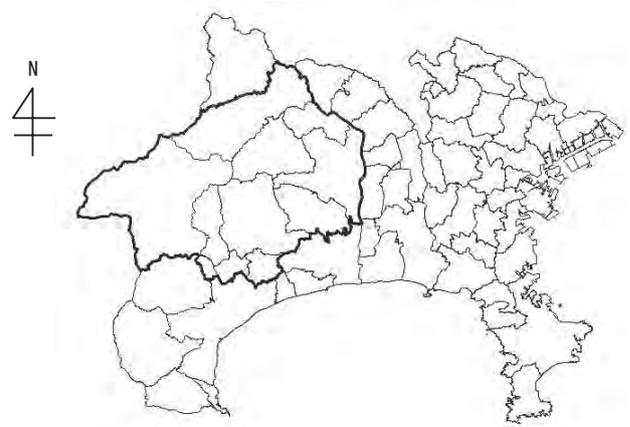


図1 調査地

太線が丹沢山地を含む市町村(相模原市は旧津久井町の範囲)

* 神奈川県自然環境保全センター研究企画部自然再生企画課(〒243-0121 神奈川県厚木市七沢 657)
(現所属: 神奈川県西地域県政総合センター森林部森林保全課)

** 神奈川県自然環境保全センター自然保護公園部野生生物課(〒243-0121 神奈川県厚木市七沢 657)

2012年度から2015年度の4か年で実施された調査結果から、カモシカの日撃頭数と調査面積を用いて生息密度を算出した。なお、県による調査以外に、清川村の札掛調査区では、NGOである丹沢けものみちネットワークが毎年ニホンジカの生息密度調査を実施している(永田・岩岡 2011)ため、札掛調査区を加えて52箇所の調査区についてカモシカの生息密度を算出した。

IV 調査結果および考察

2012年度から2015年度の4年間に累計124箇所で調査が実施され、カモシカが目撃された調査区は22箇所であった(複数年で目撃された調査区は1箇所としてカウントした)。(図2)

生息密度の最大値は秦野峠調査区の2.2頭/k㎡であり、平均は0.4頭/k㎡であった(同一調査区で複数年に目撃のあった場合は高い密度を採用し、目撃の無かった調査区は0頭/k㎡とした)。調査期間中の秦野峠調査区のシカの生息密度が8.8～

21.2頭/k㎡であり、また、20頭/k㎡以上になる調査区が複数あったこと(神奈川県 2015)と比較して、カモシカは極めて低い密度で生息していると考えられた。

カモシカは当歳子をつれているメス以外は、ほとんど単独かつ縄張りをもって生活する(岸本 1996、落合 2016)ため、シカのように極端に高密度化することは少ない。他地域でこれまでに観察された事例では、2～3頭/㎡程度の生息密度であること(環境省 2010)から、丹沢山地は全国と比較しても平均的な生息密度と考えられた。また、2004年度、2005年度の生息密度の最大値は1.4頭/k㎡であった(永田ら 2007)ことから、生息密度に大きな変動はなかったと考えられる。

現在、丹沢山地ではカモシカによる農林業被害は報告されておらず、シカのように自然植生にインパクトを与えることはない(環境省 2010)ため、現段階では、保護の必要性が高いと考えられる。しかしながら、丹沢山地のカモシカについては、行動圏や環境利用等の情報が無いため、今後、生息状況や生態に関する情報を収集しながら保護の手法等を検

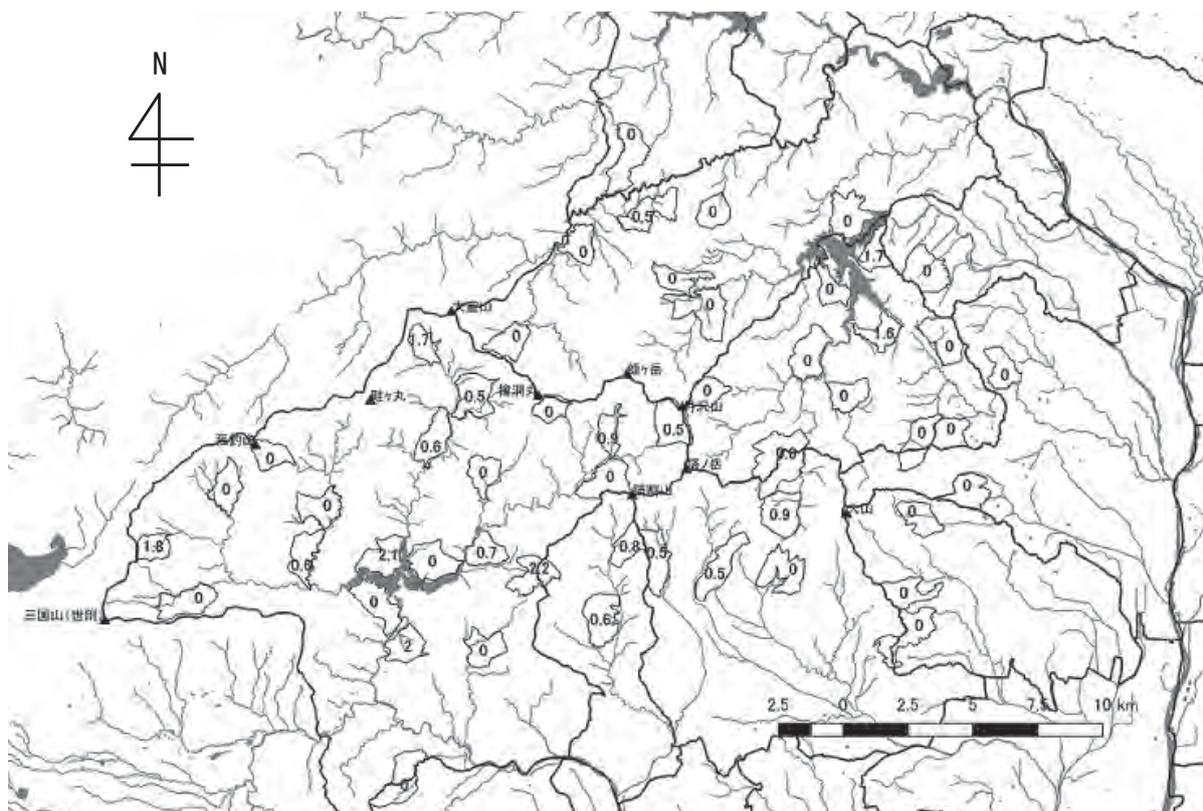


図2 ニホンカモシカ生息密度(2012年度 - 2015年度)

※数字は「頭/k㎡」を示す。「0」は目撃の無かった調査地。数字周囲の区画が調査範囲。
 ※複数年で目撃された調査地は高い密度を表示。

討することが必要と考える。

V 参考文献

神奈川県 2015, 第3次神奈川県ニホンジカ管理計画 . pp43

神奈川県 2015, 平成27年度神奈川県ニホンジカ管理事業実施計画 . pp51

神奈川県生命の星・地球博物館 2006. 神奈川県レッドデータ生物報告書 2006. pp442

環境省 2010 特定鳥獣保護管理計画策定のためのガイドライン (カモシカ編). 46pp

岸本良輔 1996, ニホンカモシカ. ニホン動物大百科. 平凡社 : 106-111

Maruyama, N and Furubayashi, K (1983)

Preliminary examination of block count method for estimating number of sika deer in Fudakake. Journal of Mammalogical Society of Japan, 9:274-277

永田幸志・羽澄俊裕・瀧井暁子. 2007. 丹沢山地におけるニホンカモシカの生息密度. 丹沢大山総合調査学術報告書 . 163-164

落合啓二. 2006. ニホンカモシカ 行動と生態 東京大学出版会. pp276

柴田敏隆. 1964. 丹沢山塊の哺乳動物. 丹沢大山学術調査報告書 : 340-343

山口喜盛・中村道也・渡邊憲子. 1998. 丹沢山地におけるニホンカモシカの生息状況. BINOS. (5) : 23-30